



# 勝坂神楽

浜松市指定無形民俗文化財



監 修／松田香代子

おもな参考文献／

「勝坂神楽の由来」八幡神社・清水神社・熊野三社（1958）

『静岡県の民俗芸能』静岡県教育委員会（1996）

『春野町史』資料編 近世（1991）

『春野町史』通史編 上・下巻（1997・1999）

『水窪の民俗』遠州常民文化談話会（2012）

制 作／勝坂神楽保存会

浜松市市民部 文化財課

制作協力／NPO 法人わたぼうしグランドデザイン

制作委託／株式会社SBSプロモーション

助 成／一般財団法人 地域創造

発 行／浜松市市民部 文化財課



映像記録ガイドブック

## 目次

アクセス	2
神楽の里勝坂	3
神楽の概要と祭礼組織	5
祭礼の次第と演目	7
使用道具	11
詞章	12
横笛	12
勝坂神楽の民俗的意義	13



### 勝坂へのアクセス

- 自家用車を利用した場合  
新東名浜松浜北インターから約80分
- JR浜松駅から約90分



勝坂集落

## 神楽の里勝坂

### 勝坂へのいざない

静岡県西部を流れる天竜川<sup>てんりゅうがわ</sup>の支流のひとつに、清流気田川<sup>けいたがわ</sup>がある。浜松市天竜区豊岡<sup>かっさか</sup>の勝坂地区は、気田川上流域、明神峡の南に位置する。北に山住神社<sup>やますみじんじや</sup>、東に京丸山(別名灰縄山)<sup>きやうまるやま</sup>、西には竜頭山<sup>りゅうとうさん</sup>から南の秋葉山へ山稜が連なり、急峻な山々は中世には修験道の行場として知られていた。『遠江国風土記伝』(1980)によれば、竜頭山のことを龍頭嶺、あるいは勝坂山と呼んで勝坂の産土<sup>うぶすな</sup>不動尊が祀られていたという。ここでは、茅原川内神社の旧蹟で、後に門桁(旧水窪町)に、最後に山住峠に遷ったと伝えられ、それが現在の山住神社であると考えられている。勝坂には北から小胡桃・勝坂・森山の3つの集落があり、1869年(明治2)には22戸が居住していたが、現在は勝坂を中心に数戸が残るのみである。近世は遠江国周智郡犬居郷に属し、2005年(平成17)浜松市に合併当時は周智郡春野町豊岡に属していた。

### 勝坂の地名の由来

中世、勝坂は犬居に本拠を置く天野氏の支配領域の北限にあったが、1576年(天正4)徳川家康の侵攻により天野宮内右衛門尉は甲州へ逃れた。家康が勝坂を通過する際、次のような話が伝わっている。家康は森山で藤蔓を取っている女に会ったので、名を問うと「お勝」と答えた。そこで、「吉左右(吉祥)」と悦び里へ案内を命じた。また、暑中のためお勝が清水を進上すると、家康はたいへん喜び歌を詠んだ。

よろこばし よもやつきなん 森山の 神のちかいに 七五三繩の内<sup>しめなわ</sup>

勝坂の地名は、『気多村誌』によれば地内に坂が多いことに由来するとあるが、当地ではお勝が案内したことから、後日勝坂と名付けることになったと伝える。また、進上した清水は現在も勝坂の本村に湧き出す場所(井戸)があり、その上に京都から勧請した清水神社を祀ったという。かつて、ここには千手観音を祀る観音堂があり、現在でも住民は清水神社を「お堂」と呼んでいる。清水神社の社殿は今も方形造で、お堂の名残を留めている。



清水神社

### 八幡神社の由来と子安信仰

勝坂の氏神は八幡神社である。八幡神社を上<sup>かみ</sup>の宮、清水神社を下<sup>しも</sup>の宮という。このほか、森山に熊野神社が祀られている。八幡神社に残る1601年(慶長6)の棟札には「慶長六年辛丑年十二月吉辰奉造陸南宮大明神社頭一宇」、「神入欄宜森山之源助并右近尉神楽男子各々諸願成就」とあり、この年に南宮大明神を造営し、神入れを欄宜の森山の源助と右近尉が行ったことがわかる。1614年(慶長19)には八幡大神を「子供留見」と森山の両所に勧請し、「東照御神君様(徳川家康公)」の武運長久を祈願したという。近年まで、森山の鈴木家はネギサマ(欄宜様)と呼ばれ、八幡神社・清水神社・熊野神社の神主を世襲で務めてきた。

八幡神社はもと子安神社であったといい、境内には「子安大神」の標柱が建っている。子宝の靈験あらたかので、祭礼には地元の人をはじめ、市外からも多くの人びとが祈願に訪れる。市外からは主に勝坂出身者が多く、勝坂出身の家が新嫁にお参りに来させることも多かった。子宝に恵まれた夫婦はお礼として、紅白饅頭を八幡神社と清水神社それぞれに12個ずつ重箱に詰めてお供えする。子どもが無事育つようと3年、あるいは5年と自分で区切って、神様にお礼参りに来る。かつては餅だったが、近年は饅頭になったという。



八幡神社



子安神社の石碑



勝坂橋のモニュメント

# 神楽の概要と祭礼組織

## 勝坂神楽とは

例年10月29日（現在は10月下旬の日曜日）、勝坂の氏神八幡神社と清水神社の大祭に五穀豊穰、子孫繁栄などを祈願して奉納される、伊勢大神楽（太神楽）の系統に属する獅子舞である。「勝坂神楽の由来」（1958）には、「御神楽獅子舞」は、「生子の厄除け厄払い」と諸祈願として行うもの」とある。

勝坂神楽は、旧勝坂小学校から行列を組んで出発し、まず下の宮の清水神社へ向かい、清水神社での神事後、神前で獅子神楽（幌舞・幣舞）が奉納される。次に上の宮の八幡神社に向かい、八幡神社での神事の最中と後の2回、神前で獅子神楽が奉納される。巡行の行列には、先導役の亀、花笠を被った舞子などが加わり、道中舞を舞いながら進む。



## 祭礼組織の変遷

勝坂は1869年（明治2）まで22戸が居住していたが、第二次世界大戦後の1946年（昭和21）には62戸393人とピークを迎えた。しかし、2002年（平成14）には16戸36人となり激減した。戸数と人口の増減は、勝坂の生



活生産活動と深く関わりがある。

勝坂の人口の全盛期に、祭礼時に祭り若連が「勝勢社」を結成して、御神楽獅子舞や地芝居などの余興を担った。若連には高校卒業の18歳から20歳くらいまでの成年男子が加入し、40歳で脱けた。現保存会長（昭和14年生）が若連に入った昭和30年代には、30人ほどの青年がいた。入りたての新人はサケワカシ（酒沸かし・酒若い衆）といい、爛を付ける下働きをした。このように戦後の勝坂に若い男



性が増えたのは、北遠の豊かな森林資源を利用して木材を伐採し搬出する基幹産業が盛んになったためである。1951年（昭和26）には気多森林鉄道が旧春野町気田から旧水窪町倉柱まで3区間に分かれて開通し、木材だけでなく生活物資の搬送にも利用された。総延長約33kmに及ぶ気多森林鉄道は、1959年（昭和34）に廃止され、木材の搬出はトラックによる陸送に取って代わられた。

1958年に発行された「勝坂神楽の由来」によれば、戸数は46戸で「祭礼若者連」はまだ健在であった。

「御神楽舞人員」の編成は、「奉納御神楽獅子舞」では御神楽舞が男子1人、横笛吹が男子2人、大小太鼓が男子2人、「渡御道中の舞」では御神楽が男子先導舞1人、他舞子が男子十数人（人員の制限せず）、横笛が男子2人、大小太鼓が男子2人であった。古くから男子が舞うもので、舞子の服装は皆女衣（女装）をまとうとある。

勝坂神楽は、1966年（昭和41）に春野町の無形民俗文化財に指定された。2005年（平成17）の浜松市との合併後も、市指定無形民俗文化財として引き継がれた。1991年（平成3）、保持団体として「勝坂神楽保存会」を結成し今日に至っている。担い手の若者が減り、勝坂区自治会に継承が委ねられたためである。保存会規約によれば、正会員と賛助会員とで構成され、正会員は自治会会員の総意による参加者、賛助会員は氏子として育ち、当地に住所を持つ者となっている。2006年（平成18）の規約改正の際に、賛助会員は、「当地の氏子として育み住所が他にあっても、地域の文化財である神楽の継承及び保存に対する理解と好意的参加によるもの、また地域外より特別の理解をもって舞いをはじめ演技に参加する好意的意思のあるものとする」に改正され、地区外の参加者について明記された。

2016年（平成28）からは大学生を中心としたNPO法人わたぼうしブランドデザインが協力して神楽の継承を担い、2023年（令和3）からは女性も舞に参加した。

2025年（令和7）現在、勝坂には6戸8人が暮らし、さらに戸数と人口が減った。保存会員の高齢化も重なり、2025年の祭礼をもって神楽の奉納を終了することとした。勝坂区自治会および勝坂神楽保存会の会員数減少と高齢化が進み、伝承母体が消滅の危機を迎えたため、自治会員総意による苦渋の決断となった。



## 祭礼の次第と演目

### 祭礼準備・楽器編成・装束

祭礼の準備は、祭りの1か月ほど前から舞の練習、花笠の貼り替え、採りものの幣切りなどを行う。若連の頃は仕事が終わってから、夜集まって作業をした。現在は、旧勝坂小学校敷地内に建つ勝坂神楽伝承館にて練習を行い、旧勝坂小学校にて祭礼道具一式の準備を行う。かつては担当者がそれぞれの持ち物を準備したが、現在は保存会会長と自治会長が中心となって、採りものや衣装の点検・準備を行っている。

役割分担は次のようになっている。獅子頭のことをオカグラ(御神楽)といい、その舞手もカグラという。カグラ・笛・太鼓は、年長者から名指して決められたが、親がやったものを世襲的に引き継ぐ傾向にあった。カグラは雌獅子だといい、体が柔らかい人が選ばれる。雌獅子は優しく女らしい所作をしながら外足で舞うため、手拭いで両膝を縛って練習した。楽器は横笛と締め太鼓で、締め太鼓は小太鼓と胴長太鼓の二種類を1人で演奏する太神楽特有のものである。

稽古や準備は目上の人<sup>ちしよかみ</sup>の指示に従い、舞はまずクチウタ(口歌、口唱歌のこと)を覚えるところから始める。クチウタは横笛の楽譜にあるように「チーリーリー」などと歌うもので、舞の所作は1週間ほど前から自主練習を行い、ある程度できるようになると笛・太鼓と合わせる。

花笠は毎年和紙を貼り替え、赤く染めた花をつける。また、ヌサ(幣)も新しく切り、三尺(約90cm)のミヤコダケの新竹に挟む。竹の長さは、神楽歌の詞章に「皆三尺の御のさを持ちて悪魔祓ふせ」と



手拭いを使って幌舞の稽古



勝坂神楽伝承館

あることに由来する。

基本的な衣装は赤い華やかな女性の着物、そして赤い鼻緒の草履である。カグラは赤い獅子頭を被る。幌も赤い花柄の華やかなものである。舞子は全員花笠を被り、幣を手に持つ。先導役ともいわれる亀は、甲羅を背負い紙の亀面を被る。手には大きな赤い盃を持つ。楽器の担当者は鉢巻きに腹掛・股引き、そして法被を着る。



先導役の亀

## 行事次第

八幡神社・清水神社の2025年(令和7)の祭礼は、10月26日(日)に行われた。祭礼前日の午前中、氏子全員で八幡神社・清水神社・巡行路の清掃を行った。神社の幟立ての根元には新しい幣束を立てる。また、八幡神社境内に祀られている個人持ちの祠も清掃され、新たにしめ縄が張り直された。

祭礼当日、参加者は伝承館前で神職よりお誠いを受ける。午前11時に勝坂神楽伝承館・旧勝坂小学校校庭を出発して南に向かい、道中舞(オネリ舞)の囃子を打ちながら清水神社に巡行する。行列は保存会長・三方・神主・亀・カグラ(右手に鈴、左手に幣)2人・笛2人・太鼓1人・舞子(右手に扇、左手に幣)13人の順で、舞子の最後尾は御神体と称する造り物の男根を背負う。かつては、行列におかめ、ひよっこなどの道化も加わった。清水神社には氏子や多くの見学者が待ち構えている。かつては、子宝祈願者やお礼参りの信者なども大勢詰め掛けていた。神事後、境内で獅子舞が始まる。

まず「幌舞(ホ口舞)」を二人立ちで舞う。カグラを被り、ホ口と呼ぶ<sup>どうまく</sup>胴幕を使って巧みに舞う。このホ口を持つのはオカメの役で、カグラと同様舞を熟知していないとカグラに付いていけない。なお、2025年にはオカメではなく、舞子の1人がホ口を担当した。次に「幣舞(ヌサ舞)」を一人立ちで舞う。太鼓の唄が終わると、ホ口を解いて再び二人立ちとなり歯噛みをして舞終わる。

12時30分、清水神社での奉納舞が終わると、再び行列を組んで北に向かい、八幡神社に移動する。行列は前記の通りであるが、榊と五色の幡を持った者が先頭部に加わる。榊と幡は清水神社境内に用意されている。

八幡神社に到着すると、まず獅子舞(幌舞と幣舞)が奉納される。この間に拝殿内で神事が行われる。神事が終了すると、勝坂神楽保存会会長より本年最後となった旨の挨拶があった。挨拶終了後、再び獅子舞が始まる。2回目の舞では幣舞の最後に舞子が変わり、カグラの周りでカグラと同様、幣舞の所作をする。笛のみの演奏の際、舞子は右手に閉扇、左手に幣を持ち、閉扇で幣の柄を打つ独特の所作をする。なお、八幡神社ではカグラが2頭出るが、これは獅子頭を新調して2つになってからの奉納舞である。本来は1頭の獅子舞である。

奉納舞が終了すると、餅投げとなる。かつて、子宝祈願のお礼参りの餅が奉納され、その餅を投げていたが、現在は自治会で投げ餅を用意して行っている。2025年の祭礼は、14時20分に終了した。



清水神社での幣舞



八幡神社での幌舞

## 幌舞(ホロ舞)

「神楽出囃子」が囃されるとカグラが境内に登場する。「幌舞」は獅子頭を被ったものが前のホロを両手で広げ、後ろのホロは別の1人が広げて持つ。まず、頭の部分が低くなり、後ろのホロ持ちはホロを広げたまま立って構える。頭が立ち上がると、前進・後退・その場舞い・右に出るというように舞う。所作の中には、太神楽に特徴的な鞠遊びのような寄席芸が取り込まれている。これには歌はなく、笛と太鼓の楽で舞う。



## 幣舞(ヌサ舞)

「幣舞」はホロをねじって後ろにまとめて体に巻き、1人で舞う。まず幣だけを持って舞い、途中から右手に鈴、左手に幣を持つ。最後にはホロを解いて後ろをもう1人が持って広げ、頭を高く低く舞い最後に歯噛みをして終わる。

舞は、太鼓持ちが要所要所に歌と掛け声を入れて舞われる(詞章は11頁参照)。舞の最後には、舞子との問答が入る。詞章の最中に楽は入らず、詞章と詞章の間に笛・太鼓の楽でカグラが舞う。

なお、八幡神社では舞子がカグラを中心に輪を作り、カグラと同じ所作で舞う。



## 道中舞(オネリ舞)

「道中舞」はオネリ舞ともいい、所作を行いながら練り歩く舞である。旧勝坂小学校から清水神社、清水神社から八幡神社へと巡行する道中で舞う。カグラは一人立ちで幣と鈴を持ち、舞子は幣と扇を持って、幣を回しながら進む。「アラセーサー」の掛け声の時に両手を前に突き出す。



## 使用道具

花笠



着物

赤い華やかな女性の着物を身に纏う



幣(ぬさ)



獅子頭

胴長太鼓



小太鼓

鈴



亀(先導役)

甲羅を背負い紙の亀面を被り、手には大きな赤い盃を持つ



横笛



男根型の御神体



おかめの面





## 勝坂神楽の民俗的意義

神楽の語源は、神座(かむくら)からきているというのが一般的な説である。神座を設けて神々を勧請し、神事芸能を行ったのが古い形だといわれている。民間で演じられている神楽は、多種多様である。たとえばその形態で、巫女神楽、出雲流神楽、伊勢流神楽、獅子神楽の4種類に分類することがある。巫女神楽とは、神に仕える巫女が舞うものである。出雲流神楽とは、出雲佐太神社に伝わる神楽で、前段で面を付けずに採りものを持って舞い、後段で神話や神社縁起を脚色した能風の舞を行う。全国各地に広まって、岩戸神楽・神代神楽・太々神楽など地方色豊かな神楽が演じられている。伊勢流神楽とは、伊勢神宮で行われていた湯立神楽を模範にして神楽の中に取り入れられたものである。そして獅子神楽は、獅子頭を持って各地を巡回し家ごと、村ごとに悪魔祓いをする神楽をいう。獅子神楽は大きく分類すると、頭上に獅子頭を載せて1人で1頭を演じる一人立ちの獅子と、1人が獅子頭を持ち1人が胴幕に入って演じる二人立ちの獅子がある。

勝坂神楽は二人立ちの獅子神楽であり、当地の若者たちによって生まれた民俗芸能である。これは、伊勢神宮や尾張の熱田神宮の神職たちが各地を廻り、江戸太神楽や水戸大神楽などにも展開し、さらに全国に広まって獅子舞の一大潮流を作った太神楽(大神楽)と呼ばれるものである。二人立ちの獅子舞では、獅子頭の中の軸を口にくわえ、空いた手で御幣や刀を持って舞い、お祓いをしたり、獅子が曲芸や狂言を演じたりした。勝坂神楽の獅子が雌獅子であるのは、太神楽で獅子が女形を演じる芝居の要素を受け継いだためとも考えられる。

伊勢・尾張に近い愛知・岐阜・静岡県から長野・山梨県には、太神楽系の獅子舞が多く伝承されている。静岡県内では、伊豆地域の伊東市や南伊豆から西伊豆にかけて広く分布し、御殿場市・富士市の東部地域にも伝わっている。西部の北遠地域では、勝坂のほか旧水窪町の神原・竜戸・小畑など、旧佐久間町の城西地区や山香地区など多くの集落で伝承されてきた。しかし、現在は水窪町奥領家の八幡神楽1か所が残るのみである。

このように北遠に多く分布してきたのは、愛知県豊川市小坂井町の「小坂井神楽」が盛んに遠州地方を廻ったことによる。近世末期には近郷近在や遠州方面に出稼ぎに行き、伊勢のお祓いと称して悪魔祓いの祈祷や散楽風の曲芸、舞、地狂言などを演じたという(『水窪の民俗』2012)。勝坂神楽保存会には、「慶応四辰年正月大吉日 大神楽并長持諸道具」と墨書された木箱が保管されている。勝坂では、1868年(慶応4)には現在の太神楽が行われていたことが知れる。また、1903年(明治36)9月6日付の『静岡新報』には、「三州小坂井大神楽」が犬居から勝坂にやってきて興行した旨が記載されている(『春野町史』通史編下巻、1999)。小坂井神楽は、この地に昭和30年代まで廻村していたという。このように、勝坂神楽のような太神楽の隆盛は近世中期から昭和30年代までとされている。

勝坂の八幡神社に所蔵されている1601年(慶長6)の棟札には、「神楽男子」という文言があり、勝坂神楽の起源をこの時に設定してきた。しかし、この時の神楽は現在の獅子神楽ではなく、おそらく神社の建立にあたって行った祓い<sup>みたまうつ</sup>や御霊遷しの神楽であったと推測される。それでも、勝坂神楽が令和の時代まで地域の宝として大事に伝承されてきたことは重要であり、貴重な無形民俗文化財であることに変わりはない。

## 役割表(2025年)



### 勝坂神楽保存会

勝坂神楽保存会会長	鈴木 康夫	亀 門奈 声
自治会長	小澤 重美	化粧 深尾 龍子
舞(師匠)	山道 行敏	賛 助 鈴木 常夫
太鼓(師匠)	大石 進	天野 勝久
笛(師匠)	彦坂 誓司	鈴木 讓
太鼓・唱	池田 好浩	小澤 秀雄
舞・花笠	小野田 透	川西 厚
〃	門奈 想	鈴木 勇人
〃	宮木 雄介	



### NPO 法人わたぼうしグランドデザイン(勝坂神楽)

代表理事	山本 逸斗	花 笠 杉山 琳
事業統括	中野 智晴	〃 高岸 暉
獅子頭	一木 大樹	〃 鈴木 美菜
〃	前田 夢稀	〃 山崎 誠司
太 鼓	小野 歩実	映像撮影 内野 里穂
〃	増田 郁生	〃 大石 悠月
笛	河守 創汰	
〃	古川 俊大	他、大学生8名

